

サヴァイヴァルを超えた命の繋がり

—— アリス・ウォーカーの『グレンジ・コーブランドの
第三の人生』における命の考察を通して¹

光森 幸子

始めに

アメリカ南部は再建期後、南部農業資本主義の下で分益小作人制度を進めていったが、その実は、ジム・クロウ法で憲法修正第13条を骨抜きにしながら解放奴隷を再奴隷化する「新しい奴隷制度」であった。アリス・ウォーカーは『グレンジ・コーブランドの第三の人生』(*The Third Life of Grange Copeland*)の中で、当時の分益小作人を体現したグレンジ・コーブランド (Grange Copeland) と彼の家族に焦点を当て、生き残る為のみに、白人の農場で奴隷のように働く分益小作人の日常や、白人支配社会の父権的価値観に縛られているが故に、家庭の中では絶対的な支配者として振る舞い、妻や子どもに暴力をふるうグレンジの姿を、リアリズムに徹して描いている。

分益小作人の生活とグレンジの家庭内暴力が密接に関係していることもあり、家族への自己責任を放棄し、南部から逃亡した後のグレンジの精神的な変化について考察する時、従来の研究では、抑圧されてきた黒人の男性性の解放に重点が置かれ、グレンジを人間としてよりも、黒人男性として考察しがちである。しかし、グレンジの精神的な成長を時系列的に眺めると、まず、彼と白人妊婦、次に、彼と息子ブラウンフィールド (Brownfield) の妻メモ (Mem)、そして最後に、彼と孫娘ルス (Ruth) とのあいだで、人間同士の繋がりを深めることにより、自己解放を達成したことが明らかである。そこで本論文ではグレンジの黒人性や男性性に終始するのではなく、人間としての彼の心の変化を順に検討することにより、ウォーカーが登場人物たちに託した、命の繋がりについて考察を深めながら、グレンジの成長を人間関係という新たな視点から読み解いてみたい。そして、グレンジが単に生き延びただけではなく、最後に誰の為に何を残したのかを明らかにしたいと思う。

¹ 本稿は、第59回黒人研究の会全国大会（2013年6月23日於日本大学津田沼キャンパス）において発表した内容に加筆修正を施したものである。

1. グレンジを通して示される人種を超えた人間の繋がり的重要性

1926年の春、グレンジは妻子を捨て、先祖や同胞たちと同様に北部に自由を求め、南部のジョージア州グリーンカウンティから逃亡する。しかし、北部は産業資本主義の下で、南部以上に、社会経済的な人種の分離が浸透し、階級差と個人主義が進んでいるので、グレンジは黒人教会や同胞からも孤立している。

冬のある日、グレンジは寒さと飢えに激しく苦しみながら、ニューヨークのセントラルパークに物乞いにやって来る。そこで彼は、偶然にも、白人妊婦と白人兵士の別れの場面を見て、人生で初めて白人に同情心が湧き、独りで泣いている彼女を心配し、話しかけようと近付いていく。これは、通常では起こりえない、黒人男性と白人女性の接触という緊張を孕んだ場面である。

この公園の場面について、この小説の登場人物たちが精神的・物理的に作り出す「囲われた場」(enclosure)について考察するセオドア・O・メイソン(Theodore O. Mason, Jr.)は、グレンジが抑圧者を殺す必要性を信じて黒人連帯意識の確立に至ったという点から論じている。「グレンジの手による女性の死は、彼に白人との親密性や連帯の未来像を明らかにしたのだが……皮肉なことに、それは最終的に彼自身の死を受け入れることによって白人と連携するという未来像である」(135)という彼の見方は、白人の生存か、もしくは黒人の生存かという、グレンジの二極的な世界観に終始している。この白人拒否の姿勢は、マリア・ローレット(Maria Lauret)が「分離主義者の哲学」(53)と呼ぶもので、彼女はグレンジのこの姿勢に注目して、ルスに育まれていく公民権運動による人種統合の視点と対比させて論じる。同様に、ロバート・ジェームズ・バトラー(Robert James Butler)も、グレンジにおける白人対黒人という世界観に縛られ、グレンジの北部での経験が、南部で白人に対し培った「同種の憎悪」(201)を彼の中に再び掻き立てたことにより、彼の精神的損傷を決定付けたと主張している。一方W・ローレンス・ホグ(W. Lawrence Hogue)は、この場面においてグレンジが「白人に対する恐怖」(105)から解放され、精神的自由を得たことをより重要視しているが、その解釈もまた、抑圧されてきたグレンジの男性性の解放という点に留まっている。

言い換えるなら、先行研究では、グレンジの第三の人生を、黒人男性であるグレンジが白人の干渉を拒絶し、抑圧されてきた男性性を解放する生活と捉え、白人妊婦の死が、黒人男性としてのジェンダーを確立する心理的転換点であったと見なしてきた。しかしウォーカーは、グレンジと白人妊婦との関係を通して、彼が後に示すようになる、人種問題を超えた、人間性の広がりにつながる、重要な精神的成長を注意深く描いている。

独りでベンチに座る「きゃしゃで、巨大な妊娠している女性」(193)を目にし

た時、グレンジは草薺にしゃがみこみ、震えながらその姿を見つめ続ける。

He was fascinated by pregnancy, and this woman's big belly brought forth a mixture of sweet and painful recollections. The creative process was tremendous, he thought. A miracle. But when he thought of Margaret's belly, bitter grimace forced themselves to his lips. (193)

この場面でグレンジが惹かれているのは、妊娠した女性の腹部である。彼はそこに命の誕生のプロセスを重ね「奇跡」だと感動する。皮肉にもこの感動が、彼の妻マーガレット (Margaret) との不毛な生活と彼の人生を振り返るきっかけをもたらす。というのも、グレンジは分益小作人であった時、小作人小屋の窓から「最初に見えるどうしようもなく酷いもの」(228)である茶色の綿花畑に因み、彼の息子にブラウンフィールド (Brownfield) と名付けたからである。その命名が暗喩するように、グレンジは分益小作人の生活に希望を失っており、その結果、彼はマーガレットを自殺に追い込み、彼の家族を崩壊させてしまったといえる。しかし、「育ち始めたこの命」(194)に惹かれた時、彼は自分が飢えていたことさえも忘れている。しかも、白人の妊婦と黒人の妻、マーガレットを重ねて考えている彼の思考には、人種を超えた人間の繋がりへの微かな閃きが生じているのである。

グレンジの心の更なる変化は、女性が待ち望んでいた白人兵士が公園に現れ、彼から指輪が渡されて彼女が幸せの絶頂にある時に、彼が自分に妻がいることを告げる場面で起きる。グレンジは、彼女が指輪を地面に捨て、彼から渡された札束を拒絶し、男性が去った後に激しく泣き始める様子を見守る。白人の恋人同士とのこの衝撃的な別れは、グレンジの心を掴み、彼は残された女性と、立ち去らねばならない男性、双方の気持ちを思い遣って心を痛めている。

It was the first honestly human episode he had witnessed between white folks, when they were not putting on airs to misinform the help. His heart ached with pity for the young woman as well as for the soldier, whose face, those last seconds, had not been without its own misery. (195)

この場面でグレンジは、白人の人間的な弱さに初めて触れたに違いない。というのも、彼はこれまで、黒人に対し、絶対的な支配者として振る舞うような白人にしか出会ったことがなかったからである。社会歴史学者レローネ・ベネット (Lerone Bennett, Jr.) は、分益小作人である黒人たちが、絶望の中で、白人に

対し「ついに屈服するか、卑屈に振る舞うか、奴隷状態で無力で黒人であるが故に、彼ら自身を憎悪する」(273) 傾向にあったと指摘しているが、グレンジもまたそのような態度で白人を捉え、支配される自身を呪っていた。分益小作人になったブラウンフィールドが農場主デイヴィス (Davis) の頭に「後光」(105) を見るのも、彼が白人を神格化し、自分とは異なる存在と見なす一方で、自己を卑下している証である。このような支配・被支配の構図の中で、グレンジは、「感情を表さない不自然な仮面」(8) を被り、生き延びることのみに囚われてきたのだ。従って、白人の男女の別れに痛ましさを感じた時、彼の中には白人とか黒人という人種の違いを超えた感情が生まれており、個人の感情をも支配してきた「新しい奴隷制度」の抑圧から解放され、白人と対等の一個の人間として、他者の心を推し量り共感するという、人間らしい、憐みの感情を取り戻していると言える。

その後、グレンジは、彼女が落とした指輪と札束を拾い、まず逃げることを考えるが、彼が見たことが「あまりに強く胸を刺し、悲しく、計り知れないほど哀れだったので」(197) 立ち去ることができず、池のそばにいる彼女に近付いていく。人種差別社会においては、異人種の異性どうしは接触しないよう常に警官に監視されているにも拘らず、グレンジは激しい感情に突き動かされ、人種の垣根を越え、社会が強要する行動様式を崩していくのである。

しかし、白人との間に「大きな違いの無さ」を感じて「痛みが全ての者を平等にした」と判断し (198)、人間どうしの繋がりを求めるグレンジの共感とは裏腹に、女は凍った池に20ドル札を投げ、懸命に拾おうとするグレンジを侮蔑し、「彼らの間にある、可能な共感の絆の全てを切る復讐心」(199) で人間の繋がりを絶つ。そんな彼女は彼を避けるように草むらに飛び移ろうとし、誤って凍った池に落ちてしまうのだが、その時、グレンジは咄嗟に台を駆け降り、助けようと手を伸ばす。

In a split second he recalled how he had laughed when his grandfather admitted helping white “masters” and “mistress” out of burning houses. Now he realized that to save and preserve life was an instinct, no matter whose life you were trying to save. (201)

白人女性を助けようとした瞬間、グレンジは己の姿と、かつて奴隷主の家族を救った祖父の姿を重ねる。そして、冷酷な支配者を救った祖父を嘲笑った自分を思い出すことにより、人には他の人の命を救おうとする「本能」があることに、言い換えるなら、支配者と被支配者の関係を超越するような人間的な繋がりがあることに、それまで自分が気付いていなかったことを実感したのである。

もっとも、「彼の手」(201)だと知ると、白人妊婦は掴んだ手を離し、「黒んぼ」(201)と憎悪を込めて叫びながら池の中に沈んでゆき、グレンジは彼女に背を向けて公園を去る。従って、この時のグレンジは、人間の繋がりを本能的に感じただけで、その感触を十分に定着させてはいない。そして、彼はその後ジョージア州に戻り、彼の農場に有刺鉄線を張り巡らせ、白人を拒絶した生活を始めるので、人種関係からこの作品を読むメイソンやローレットは、グレンジが女性を見殺しにしたことを、彼が分離主義の信望者になる契機としてしか捉えていない。彼らはまた、バトラーと同様に、白人至上主義を体現した白人女性の死についても、「活力に満ちた黒人のコミュニティ」(201)を創造する為の、グレンジの第三の人生への分岐点であるとしか理解していない。ホーグの主張する、グレンジの「ニューヨークでの転換」(105)も、こうした解釈と歩調を合わせるものである。

しかしながら、これらの先行研究は、白人妊婦が溺れ死んだ後も、グレンジには「彼女とその大きな腹」(201)が付き纏っている点を見逃している。人種関係だけで作品を読むと、彼女を見殺しにしたことを絶えず自身に正当化せずにはおられない、彼の心の葛藤を見落としてしまわざるをえない。しかし、彼は女の死を、「まさに殺人」であり「魂を苛むような」(202)ものだと考えており、人種を超えた人間の繋がりへの微かな閃きは、彼の中で潰えてはいない。ルスに最後まで決してこの事件について語ることができないのも、このことについて自分を責め続けていればこそであろう。それ故、白人妊婦との関わりは、グレンジにとって個人の命を超えた命の繋がりを認識する出発点と見なすことができ、彼の内面の成長において大きな役割を荷っていると言える。

2. メムを通して示される暴力を超えた人間の繋がり的重要性

グレンジの内面変化はメムとの関係によって更に強化される。ウォーカーはジョン・オブライエン (John O'Brien) とのインタビューの中で、この小説は、表向きは男性と彼の息子についての物語であるが、描かれているのは、実は「女性であり、彼女たちの扱われ方が全てを彩っている」(“From an Interview” 251)と明かしている。ブラウンフィールドに献身的なメムも、マーガレットがグレンジに扱われていたのと同様に、次第に、夫から奴隷と見なされるようになる。

メムは教育を受けた黒人女性でありながらブラウンフィールドと恋に落ち、分益小作人の妻になり、夫と子どもたちに愛情を注ぎながら、小屋を「家」に変える為に懸命に努力し続ける。しかし貧困と絶望の中で、ブラウンフィールドは次第にメムと娘三人に暴力を振るい始め、彼女たちを恐怖に陥れる。実際、この当時、社会から周縁化された農場で暮らす多くの黒人女性たちは、メム同様に、小屋の内では黒人男性の精神的・肉体的な暴力に、また外では白人の性暴力に独り

で耐えていた。社会学者の W・E・B・デュ・ボイス (W. E. B. Du Bois) は、当時の南部の黒人女性が黒人男性よりもひどい、「最低の状況」(94)に置かれ、人生の選択肢が彼ら以上に限られていた点を問題視しているし、ダグラス・A・ブラックモン (Douglas A. Blackmon) は、クロップリエン制度の下で「南北戦争前に存在した黒人女性との性交権は、白人の農場では変わらない習慣であった」(243)と、彼女たちが白人支配者の思いのままにされていた点を指摘している。

こういう逆境に置かれた結果、結婚五年目にして、メムは「愛情に溢れた、人を信じる明るい目をした」(65)女性から、「やつれた、機械的に動く醜い老婆」(74)に変貌している。また、ブラウンフィールドは、彼女に学校の教師を辞めさせ、白人家庭の下働きをさせ、メムがクリスマスの夜、子どもたちのプレゼントを抱えて仕事から帰宅した時に、猟銃で彼女の頭を撃ち抜く。この出来事は、物語としては「身内殺し」のプロットであるが、メムは単に「新しい奴隷制度」の下で孤独に滅んでいった、名もない黒人女性の犠牲者を体現しているだけなのであろうか？

メムの最後の場面は、ルスの視点から次のように描かれている。

Why had her mother walked on after she saw the gun? That's what she couldn't understand. Could she have run away or not? But Mem had not even slowed her steps as she approached her husband. After her first cheerful, tired greeting she had not even said a word, and her bloody repose had struck them instantly as a grotesque attitude of profound, inevitable rest. (161-62)

目撃者ルスの心に沸いてくる疑問を通して、この出来事を夫による妻の「殺害」という表面的な解釈に留めず、彼の凶弾から逃げることもできたのに、敢えてそうしなかったメムの内面を考察させようとする作者の意図が窺える。しかも、メムはクリスマスの果物や菓子を抱え、疲れてはいるが、夫に明るく挨拶をしているので、彼女が自暴自棄になり、人生を放棄したという解釈は当て嵌まらないだろう。

ネグアルティ・ウォレンとサリー・ウォルフ (Nagueyalti Warren and Sally Wolff) は、この場面について言及した数少ない研究者であるが、「普通の生活を送るに値する人間であると、自身を見なすこと」(6)を拒否した「メムの盲目性」(6)を示す比喩であると説明するのみで、メムの死に積極的な意味を与えてはいない。更に、メム自身の解釈についても、エリオット・バトラー＝エヴァンズ (Elliott Butler-Evans) が、「夫ブラウンフィールドの残酷性と非人間性を強調し

ているので、テキストの中でメムは悲哀を象徴している」(114)と述べる等、彼女の役割は補完的に解釈されがちである。あるいはまた、メムは教養という人生の可能性を持ちながらも「青年期に育んだその学問的で、創造的で、知的な好奇心を発展させる機会や、選択の自由は決して持たなかった」ので「出口のない社会の罫にとらえられている」(111)と見なすホーグのように、メムを社会と夫の暴力の犠牲者として、更には、メムは「自尊心を保つよりは、むしろ夫の人生観に左右される」(Christian 62)女性で、当時の社会の価値基準の枠を超えられなかったとするバーバラ・クリスチャン (Barbara Christian) のように、彼女を一般的当時の黒人女性の象徴としてのみ捉える批評家も多い。

しかしながら、メムが自ら進んで銃に撃たれたことはもっと重視されるべきである。というのも、彼女の積極的な死の受容を、暴力に対する彼女の最後の抵抗と見なすならば、メムは単なる犠牲者以上の意味を持ってくるからである。つまり、メムの死の選択は、最後まで人間の繋がりを求めて闘った、彼女の創造力を武器にした抵抗と受け止めることが可能なのである。メムのこうした抵抗は、彼女の読み書きの能力を、「彼には決して近付くことのできない白人の力」(73)と見なし、彼女の本を焼却させ、小作人仲間の前で彼女を嘲ることによって、彼女の洗練された話し言葉を、「力の無い」、「単調で醜い」(75)ものに変えるブラウンフィールドの暴力に対し、殴られ、歯を折られても、「重い足取りで、子どもたちの為に、牝牛のように、足を引き摺りながら歩む」(78)、メムの不屈の姿に既に見て取れる。そして、惨めな小屋から小屋へ移らされても、「豚小屋のような場所」(110)を「家」(77)に作り変え、種を蒔き、美しい花壇を作る姿は、受動的な屈従の抵抗を超えた、より積極的な抵抗と言えるだろう。

メムのこの行為にウォーカーが未来を見据えた肯定的な意味をもたせていたことは、エッセイの中で、メムのように、荒れ果てた住居を花で飾った自分の母親について、次のように高く評価していることから明らかである。

Because of her creativity with her flowers, even my memories of poverty are seen through a screen of bloom—sunflowers, petunias, roses, dahlias, forsythia, spirea, delphiniums, verbena ... and on and on. ("In Search of Our Mother's Garden" 241)

ウォーカーの母が「彼女が引越した、岩だらけの何処の土地でも」(241)、「美しい色彩に輝く、独創的なデザインで、命と創造力に満ちた」(241)庭に作り変えたという時、ウォーカーは「野心的な」(241)「家」や花壇が、人種差別社会に対する、暴力を用いない抵抗になり得ることに気付いたに違いない。

更に、メムの話し言葉は「彼女の内から表現されるので、その言葉でさえ、彼らが住んでいる絶望のハーモニーを粉碎した」(78) というように、彼女は言葉でも暴力に抵抗している。メムが、白人の農場を出て、街に仕事を得て家を借り、家族で移り住むことを決めることも、社会の最下層に生きる人間に対してシステムが要求する人生を、撥ね付けようとする抵抗と言えるだろう。実際、そうだったからこそ、父権的価値観に固執するブラウンフィールドの暴力は激化したし、メムも生存を賭けて、意志に反した暴力的手段に訴えざるをえなかったに違いない。

ところで、ウォーカーはエッセイの中で、人種問題を論じる時に「家庭内で起きていることが見逃されている」(“If the Present Looks Like the Past” 310) と述べ、「内乱の可能性を孕む」(310) 家庭に言及している。メムもまた、このような孤独に闘う女性のひとりだったに違いない。実際、メムは、白人支配者が黒人を呼びつける場合の呼称を敢えて用い、ブラウンフィールドを「ボーイ！」(125) と呼びながら、白人至上主義の象徴である猟銃の銃床で彼を殴りつけるが、この行為は、「新しい奴隷制度」から家族を解放する為に、家庭内から「内乱」を開始しようとする、決死の覚悟を示している。この場面については、グレンジに対して白人か黒人かという二極的な読みを示すメイソンでさえ「メムは、異なる主義に基づく、彼女自身の新しい物語を創造しようと試みている」(133) と、彼女の抵抗を人種と切り離された新しい生き方に結びつけて肯定的に評価している。言い換えるなら、メムにおいては暴力的行為でさえ反動的な復讐心や支配欲によるものではない。彼女がブラウンフィールドに提示する十か条の「人権宣言」にも示されているように、彼女が人種差別主義を超えた視点を持っていたことは明らかである。

一方、支配・被支配の二項対立的価値観に囚われているブラウンフィールドには、メムの人間的立場に立った闘いは理解の域を超え、メムは単に男性の権威を脅かした「気の狂った女」(78) として、抹殺せねばならない存在になる。その結果、メムの暴力は、ブラウンフィールドの「妻殺し」に繋がり、彼女の抵抗を頓挫させたように見える。ローレットは、メムがブラウンフィールドに対して立ち上がり「一時的に抵抗の喜びを経験する」ものの、「彼女が夫に用いた銃による抵抗は、結局彼女に返り、悲惨な結果を齎した」(57) と、メムの行為が無為に帰した点を重視する。しかし、メムが自ら死を受け入れたという点を考慮するなら、この場面はもっと肯定的に評価できるだろう。

というのも、メムに自分の死を覚悟させたものは、暴力という間違った手段を用いてブラウンフィールドに抵抗した自分自身に対する罰と見なせるからである。ウォーカーは語り手の声を借り、争いを好まないメムの「激しい怒りは彼女を怖がらせ」、「彼に対する彼女の一度の暴力行為は、生き延びる為の行為だと彼

女は考えたに違いないが、彼女を以前よりも一層貶めた」(286)とメモの気持ちを代弁している。このことから、メモは暴力が人間の繋がりを絶つことを理解し、自身を責めていたことは明らかである。従って、命の繋がりを否定するような自分の行為は、自身の死で償って当然と考えたはずである。その一方で、命を投げ出してまで犠牲者であることを拒絶したメモの姿には、最後まで自らの手で道を切り開こうとする抵抗の姿勢が見て取れるのである。

更に、ウォーカーは語り手の声で、メモは「激しい怒りの代わりに、精神の独立性、自身の核、固い岩を持っていた」(286)と述べているが、その強い精神がこうした断固たる最期にも現れている。この小説の後書きで、ウォーカーが、メモの名は「『同じ』を意味する仏語の *la même*」(316)であり、暴力に抵抗する「全ての女性たち」(316)を象徴していると明かしていることから、人間の繋がりを最後まで求め、自らの死でもって暴力の連鎖に終止符を打ったメモの崇高さに、ウォーカーは黒人女性の希望を託していたと考えられる。

このように、自発的に死を受容することで暴力を超え、人間の繋がりを貫こうとした姿勢があればこそ、グレンジはメモを「聖人」(166)と呼んだに違いない。そして、彼がメモのその性質に目を向け、日々の生活の中でメモを生かし、彼女をルスの「ロール・モデル」(Butler 198)となして、ルスを導いてゆく時、彼は白人妊婦の死を通して感じた、人種を超えた人間の繋がりを反芻し、過去の自分に目を向けている。その態度には、メモが自身を罰した原因である暴力を手段とせず、グレンジが自己変革できる可能性が暗示されているだけではない。メモが無言で行った最後の抵抗をルスが目撃することで、ルスが彼女の抵抗を受け継ぐ者として、黒人たちの集合的な声を体現してゆくであろう、彼女の未来の役割も予兆されているのである。

3. グレンジの命を受け継いだルスにウォーカーが託そうとした未来

ルスはグレンジに深い愛情と信頼を寄せ、一方グレンジはルスの純真な心に接し、「熟考と自己省察」(Christian 69)へ向かい、白人への憎悪から罪を犯してきた自分を心から恥じる。

ウォーカーはインタビューで、グレンジは「幸運にも、彼自身を超えたあるものへの愛によって心を動かされた」(“From an Interview” 253)と述べているが、彼に変化を齎したものはルスへの無条件の愛だったに違いない。グレンジのこうした内面の変化は、刑務所を出たブラウンフィールドに対峙する時、彼が自身の過去の過ちを認める言葉に現れている。グレンジへの復讐の為だけにルスの親権を主張する息子は、既に「アメリカの荒廃」(185)の中で「生きながら死んでいる者」(185)であるが、グレンジは自身の過ちを息子に伝えることで、息子の人

間性の回復を促し、彼との繋がりを求めようとする。

“By George, I *know* the danger of putting all the blame on somebody else for the mess you make out of your life. I fell into the trap myself! And I’m bound to believe that that’s the way the white folks can corrupt you even when you done held up before. ‘Cause when they got you thinking that they’re to blame for *everything* they have you thinking they’s some kind of gods! You can’t do nothing wrong without them being behind it. You gits just as weak as water, no feeling of doing *nothing* yourself. Then you begins to think up evil and begins to destroy everything around you, and you blames it on the crackers. *Shit!* Nobody’s as powerful as we make them out to be. We got our own *souls*, don’t we?” (263)

自分の精神を支配するような破壊的な神を自らの手で創造した時、人は自己責任を放棄し、本当の奴隷になるというグレンジの考えは、支配・被支配のイデオロギーを超えた、彼自身の「奴隷解放宣言」として解釈できる。というのも、実存的な問いをブラウンフィールドに投げ掛けながら、自分の中に「彼らが決して近付けない場所」(265-66)を構築する必要性を訴えるグレンジの姿には、彼が知らず知らず抱き続けてきた人種差別意識を超えて、自由で平等な立場で自己を確立したことが示されているからである。

一方、この小説の登場人物を、個人の複雑な内面からではなく、物語の構想や歴史的視点から捉えるバトラー＝エヴァンズも、この場面のグレンジには、彼の人格の変化を認めている。彼がグレンジに「人間の可能性の体現」(111)を読み取り、「彼の変化の核」(111)に「この小説のイデオロギーの表明」(111)があると述べているのは、グレンジの人間性の主張を、この物語の重要な転換点と見なしているからだと言える。ウォーカーも、白人に付与された奴隷解放とは異なる、グレンジが人生を賭けて学び、掴み取った自己解放を重要視するからこそ、彼の精神の広がり の最高点をこの科白に託したに違いない。

グレンジとは対照的に、ウォーカーはブラウンフィールドについて、「何かの為に、いや何かに対して彼の命を捧げる覚悟がなかったので、彼は変わらなかった」(“From an Interview” 253)と述べる。実際、ブラウンフィールドはグレンジを「白人の肩を持つ奴」(263)としてしか考えられず、最後まで奴隷的精神から抜け出せない。彼はルスを「鶏や豚のように」(279)所有する為に、黒人の「誕生、生、死」(308)全てを司る「神を演じる」(308)白人の裁判官を利用しさえするが、その人非人的行為が彼の人間性を崩壊させてゆくのである。

もっとも、ウォーカーは、クローディア・テイト (Claudia Tate) とのインタビューの中で、このように全ての人間との繋がりを断ち切り、自己破壊的な行動に走るブラウンフィールドを描いた背景には、こうした人物が数多く実在する南部の過酷な現実があることを示唆している。

I will not ignore people like Brownfield. I want you to know I know they exist. I want to tell you about them, and there is no way you are going to avoid them. You are going to have to deal with them. I wish people would do that rather than tell me that this is not the right image. You know, they say this man Brownfield is too mean; nobody's this mean. (177)

ウォーカーは不正義に満ちた南部社会が、ブラウンフィールドのような人物を再生産し続けている現実を知っていればこそ、システムに迎合し、奴隷的精神に囚われたブラウンフィールドのような人間を描き、南部を批判しようとしたのであろう。彼の問題は個人の特異性に帰されてしかるべきものではなく、南部に根強く残り続ける社会悪とも言うべきもので、それ故に一層、悪循環の思考を断ち切り、「新しい奴隷制度」の犠牲者になることを拒絶したグレンジの自己解放には、重要なメッセージが込められている。

しかしながら、グレンジが到達した点が、個人として抵抗できる限界であることもまた、ルス意志を無視して親権を手に入れた「彼自身が創り上げた獣」(263)を撃つ姿に示されている。グレンジは、人間の繋がりを理解したにも拘らず、ルスの未来を守る為に暴力的手段に追い込まれ、ブラウンフィールドを殺す。彼の選択は、暴力という、黒人を縛り付けてきた運命に抗う術がなかったかのようである。しかし、白人至上主義の代弁者となった息子を殺すほどに社会システムに抵抗し、「生きたいという最も情熱的な欲望」(202)を抱いた瞬間が、同時に、暴力を用いて人間の繋がりを絶ち、その責任として「自分の死を避けられない」(202)パラドキシカルな状況をもたらすと、彼が理解していることは注目に値する。

警察に追われるグレンジは、「彼の一部である」(252)ルスに、彼自身の死の覚悟を次のように伝える。

"I ain't," said Grange, "but you do." He ran his hand over his eyes. "A man what'd do what I just did don't deserve to live. When you do something like that you give up your claim." He slumped on the seat. "And what about that judge?" he asked bitterly. "Who will take care of him?" (310)

もはや自分は生きるに値しないと告げる時、命の繋がりを絶った者の責任を彼が明確に意識していることが示されている。このような責任を自身に課すグレンジは、あくまでも人間の繋がりを求めて独り抵抗し続け、自らの暴力に対しては自身の死で償ったメムと重なる。それ故、彼の行為を、人種差別社会で繰り返される「身内殺し」であると、安易に理解することは許されない。しかも、「でも、お前は生きるんだ」という彼の言葉には、ルスには暴力を超えて命を繋いでほしいというグレンジの願いが託されている。

ところで、グレンジを分離主義者として読むローレットは、彼の死を、「癒しを与えるような、暴力の無い未来を体現したルス」(58)の為の「犠牲」(58)と捉え、システムへのブラウンフィールドの「服従」(58)も、グレンジの「憤り」(58)も、彼らと共に葬り去られると述べている。確かに第三世代のルスには、彼らの生き方とは異なる、暴力に頼らない、公民権運動による抵抗の到来が予想できる。だがローレットは、グレンジの自発的な死の受容に意義ある抵抗を見出してはいない。更にバトラーも、「南部の不正義はグレンジの命を奪う暴力を噴出させたが、彼の死は、広がりゆく可能性のある新しい人生の為に、ルスを自由にする」(200)と、ローレットと同様、グレンジの死を犠牲と捉えるだけで、その死に意味を読み取ってはいない。

しかし、実際には、グレンジは自身の死を通して、最後まで人種を超えた命の繋がりを求めて抵抗している。というのも、グレンジの最後の問い、「でも、あの白人裁判官は一体どうなるのか」には、「正義」の名の下に、黒人と白人の繋がりを絶とうとする白人裁判官への憤りがにじみ出ているからである。それは、白人は何の責めも負っていないではないかという単純な非難ではない。白人妊婦を通して人種を超えた人間の繋がりを学び、人間の繋がりを絶つ暴力に最後まで抵抗したメムを知っているグレンジは、一つの大きな命の流れに自分が生きていることを認識したからこそ、ブラウンフィールド殺害によってそれを断った責任を引き受ける。一方、この「身内殺し」を引き起こした白人裁判官は、グレンジに追っ手を差し向けて殺すことで、今度は、彼自身も一部を荷っているその大きな命の流れを、自ら断とうとしているのである。グレンジは、それに対し、彼の暴力の責任が問われねばならないと考えているに違いない。メムと同様に、死を能動的に受容することによって、グレンジは社会の暴力の犠牲者という立場を逆転させ、暴力を糾弾し、命の繋がりの尊さを主張するだけでなく、人種を超えた、過去から現在に繋がる一つの大きな命を、一人一人が受け継ぐ責任を荷っていると主張しているのである。

このようなグレンジの信念は、彼が家から武器を全て持ち出し、ルスを後に残し、警察を自分に引き寄せて撃たせる姿に象徴されている。そこには、暴力に自

ら終止符を打ち、ルスには、もはや暴力による抵抗を必要としない生き方をしてもらいたいという、彼の姿勢が読み取れる。警察官に撃たれたグレンジは、彼がルスの「家」(310)として建てた小屋の外で、木に寄り掛かり、その膝には日光が交わるように射している。信念を全うしたグレンジの最期に、ウォーカーは、インタビューの中で肯定的な評価を与えている。

To him, the greatest value a person can attain is full humanity, which is a state of *oneness* with all things, and a willingness to die (or to live) so that *the best* that has been produced can continue to live in someone else. He “rocked himself in his own arms to a final sleep” because he understood that man is alone—in his life as in his death—without any God but himself (and the world). (“From an Interview” 265 筆者強調)

グレンジの精神的な成長は、「全てのものとの一体になった状態 (a state of oneness)」という形で完結する。しかし「全てのものとの一体 (oneness)」でウォーカーが示す状態とは、外在する、支配的な神への帰依ではない。このインタビューの中で、グレンジは最後に「抱きしめる価値のある、神としての、マン＝ウーマンカインドの人間性」(265)を認識したと述べられてもいることから、「全てのものとの一体」とは、彼が内省的思考を深めた結果、自身の内に見出し得た、全ての存在と彼自身との調和であると考えられる。そうした調和は、白人と黒人の学生グループが、グレンジの農場に有権者登録運動で訪れた時、彼が白人の女学生キャロル (Carol) を受け入れる時にすでに窺えた。そして、この人種と暴力を超えた、ウォーカーが「全てのものとの一体」と呼ぶ調和こそ、第三世代のルスが継承する「最高のもの」と言えるだろう。

グレンジの残す「最高のもの」が受け継がれることは、ルスの成長にはっきりと示されている。ルスは、グレンジと一緒に家事をすることを通して黒人女性たちの伝統的な生活を知り、彼のダンスを通してアフリカの先祖たちの、学校では「教えられない歴史」(176)を知り、彼の視点で語られる黒人の民話の中で、「ルスのヒーロー」(169)となった人物の知恵と勇気を学んだ結果、「真実の種」(272)を探求する目を持つに至る。従って、ルスが父ブラウンフィールドに対し、教養の象徴である本を胸に抱えながら、「私には知性があるわ、私には記憶力があるわ……私はあなたのものではないのよ」(278-79)と自己主張する時、彼女の言葉は、自身の「奴隷解放宣言」であると同時に、グレンジを超えゆく姿勢でもある。こうしたルスの心には、「私はとっくに立ち上がる準備はできているのに彼らはまだなんだから、私がまず最初に立ち上がって、彼らが私に従えば

いいのよ」(252)という、メムとグレンジの抵抗の意志を受け継いだ、人種差別社会に立ち向かう独立心が芽生えていることは明らかである。

ルスの精神的な成長と呼応させて、ウォーカーはアメリカ全土を巻き込んでいく時代の胎動を描いている。ルスは、「黒人と白人は一緒に」(296)という看板を掲げ、黒人学生と白人学生が共に、彼女の住むベイカー郡に行進してくる姿を見た時、俄かには信じがたい驚きを感じている。ルスの受けた衝撃は、ウォーカーが直接体験した「人間関係において、私たちの歴史の中で初めての、黒人と白人の調和」(“The Civil Rights Movement” 125)と同じものである。ウォーカーは、ルスと公民権運動との出会いに、「それは明日への希望を私たちに与えた。それは私たちを人生へと招いた。」(129)という自身の感動を重ねて描きたかったのであろう。そして、キング牧師 (Dr. Martin Luther King, Jr.) からウォーカーが受け取った「非暴力と愛と同胞愛」(124)という公民権運動の精神にこそ、グレンジが最後に問うた白人裁判官の暴力を解決する力を、ウォーカーは見出していたに違いない。というのも、「白人社会が黒人女性に強要しようとする制約を超越する」(Butler 198) 力を身に付けた第三世代のルスには、公民権運動を通し、人間の絆を絶つシステムを集団で変革する新しい世代として、より多くの人々との繋がりを作り出してゆくであろう力が暗示されているからである。

終わりに

結果論で見ると、グレンジは、最終的には、人種差別社会で繰り返される暴力的解決によりルスを守ったことになる。しかし、彼は「新しい奴隷制度」の犠牲者として卑屈に生き延びたのでも、無駄に死んだのでもない。彼の自己変革は、最初、白人の妊婦を見殺しにした時に始まり、メムとの関係で着実に深まり、やがてルスに未来を託す形で完結したからである。彼の生き様には個人の限界がありはするものの、伝統的な黒人作家の抵抗文学を超えた、人間同士のより深い繋がりを模索する姿勢が反映されている。こうした人と人の繋がりは、作品を人種的対立や男女の対立関係からではなく、グレンジの精神的な成長から捉えて初めて明らかになる。またそうして初めて、彼が到達した「全てのものと一体になった状態」の意味も、ウォーカーが他の作品で使用している意味と重なって、明確になるように思える。そして、グレンジが、不平等な社会システムに真の社会変革をもたらす「非暴力直接行動」の種として、第三世代のルスに受け渡した、この「全てのものと一体になった状態」という、全ての人と人との深い絆こそが、ウォーカーが未来へ託すメッセージだったと言えるだろう。

広島大学大学院

参考文献

- Bennett, Lerone, Jr. *Before the Mayflower: A History of Black America*. New York: Penguin, 1993.
- Blackmon, Douglas A. *Slavery by Another Name*. New York: Anchor, 2009.
- Butler, Robert James. "Alice Walker's Vision of the South in *The Third Life of Grange Copeland*." *African American Review* 27.2 (1993): 195-204.
- Butler-Evans, Elliot. "History and Genealogy in Walker's *The Third life of Grange Copeland* and *Meridian*." Gates and Appiah 105-25.
- Christian, Barbara. "Novels for Everyday Use." Gates and Appiah 50-104.
- Du Bois, W. E. B. *The Souls of Black Folks*. New York: Norton, 1999.
- Gates, Henry Louis, Jr., and K. A. Appiah, eds. *Alice Walker: Critical Perspectives Past and Present*. New York: Amistad, 1993.
- Hogue, W. Lawrence. "Discourse of the Other: *The Third Life of Grange Copeland*." *Bloom's Modern Critical Views: Alice Walker*, Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea, 1989. 97-114.
- Lauret, Maria. *Alice Walker*. New York: St. Martin's, 2000.
- Mason, Theodore O., Jr. "The Dynamics of Enclosure." Gates and Appiah 126-39.
- Tate, Claudia. *Black Women Writers at Work*. Harpenden: Oldcastle, 1985.
- Walker, Alice. "The Civil Rights Movement: What Good Was It?" Walker, *In Search* 119-29.
- _____. "From an Interview." Walker, *In Search* 244-72.
- _____. "If the Present Looks Like the Past, What Does the Future Look Like?" Walker, *In Search* 290-312.
- _____. *In Search of Our Mother's Gardens*. 1983. London: Phoenix, 2005.
- _____. "In Search of Our Mother's Gardens." Walker, *In Search* 231-43.
- _____. *The Third Life of Grange Copeland*. 1970. San Diego: Harcourt, 2003.
- Warren, Nagueyalti, and Sally Wolff. "'Like the Pupil of an Eye': Sexual Blinding of Women in Alice Walker's Works." *Southern Literary Journal* 31.1 (1998): 1-16.

Human Bonds beyond Survival: Through the Interpretation of Life in Alice Walker's *The Third Life of Grange Copeland*

Sachiko Mitsumori

Alice Walker focuses on the lives of sharecroppers suffering under Jim Crow laws in the post-Civil War South in her first published novel, *The Third Life of Grange Copeland*, by realistically delineating the life of Grange Copeland. Facing everyday hardships, Grange's main concern is to survive the crop-lien system, which was de facto slavery by another name, through its rigidly hierarchical structure. It is reasonably assumed that his violence against his wife and his son, Brownfield, is deeply rooted in white supremacy. Therefore, in previous studies, Grange's behavior has been mostly construed as the reactions of an archetypal black male against white male dominance. Even the incident of Central Park in New York has been considered from such dichotomous perspective.

Grange shows a remarkable self-development when he happens to see the breakup between a pregnant white woman and a soldier in the park. Feeling deep sympathy for the white people for the first time in his life, regardless of the danger, as an equal human being he tries to cross racial boundaries in order to console the grieving woman. Consequently, her refusal of his approach and her hatred of blacks cause her to slip into a pond and die. Despite the fact that he had got a glimpse of the human bonding beyond race, after she releases his rescuing "black" hand, Grange lets her die in the frozen pond. However, it should not be overlooked that, whereas the white woman's death restores his manhood and rekindles his racial pride, his flash of inspiration "to save and preserve life is an instinct" continues to haunt him, and he accuses himself of this "murder" for the rest of his life.

After Grange returns to Georgia, his emotional growth becomes reinforced by understanding the lonely battle of his son's wife, Mem. She is more marginalized than Brownfield, living in a cabin on a white man's plantation. Mem represents any anonymous sharecroppers' wife, who is a victim of racism and sexism in society as well as at home, an archetypal black female who has no chance to develop her inner self. However, through Ruth's eyes, Walker implies Mem's unyielding resistance against falling victim to the

system. That Mem voluntarily gets shot by Brownfield should be given more consideration. She thought her violent act against her brutal husband as horrifying but necessary for survival, to protect her children from him and also to liberate him from “new slavery.” By giving up her life in atonement for her “sin,” she tried to put an end to the chain of violence. Grange understands her struggle for finding human bonds in the segregated social milieu and guides Ruth by regarding Mem as her role model. Thus, Walker places Ruth as a witness to Mem’s silent resistance, and leaves her the future responsibility to embody collective voices of black people.

Through his unconditional love of Ruth, Grange realizes that he was once trapped in the system by creating a white destructive “God” inside him, and that he made himself a slave by abandoning his responsibility for his family. The understanding Grange has obtained in his life can be interpreted as his own “emancipation proclamation.” Whereas Grange thus achieves self-realization by overcoming his own racism, Brownfield becomes an agent of white supremacy—“living dead” who regards a white judge as his God and uses his power to get Ruth back to him. On the surface, Grange’s killing of Brownfield is “kin killing” in a racist society. When Grange shoots Brownfield to protect Ruth from him, at the same time, he is determined to give up his life, for he had already learned that his life was not only his own. It was passed on to him through generations and it must continue in the next generation. Hence, in condemning violence, Grange voluntarily takes responsibility for breaking off his human bonds in the same way that Mem did. As a result, Grange’s achievement of his full humanity, which is “a state of oneness,” is firmly passed on to Ruth.

Graduate School of Letters, Hiroshima University